展景

No.92



目次

神

今号
0
Ź,
メ
ĺ
ン
/
カ
IJ
フ
É
ワ
Ì

編集後記

無二の会短信

「清紫会」だより

前号作品短評A

エッセイ教室「清紫会」

の作品より

雀の話 ……

松井淑子

67 64

74 68

対詠 ごきげんいかが?

PART 68

小野澤/布宮/河村

62 60 58 34

河内愛子

特に私がお前を選んだのは

ざわめいている雰囲気の中でも

そこだけがつつましやかに明るくて

それでいて

淋しそうなお前の姿に

私の心が惹かれたからだ

展景 No. 92

5

そして

生まれるようになった

そこからふたりの詩が

お前も

私に問いかけて

私はい

つも

お前に話しかけ

それからの

市 川茂子

す すき原テ Vビ 13 映 ŋ な 9 か 仙 石 原 O旅 を思う

旅 に 見 ノパ ン ノパ ス グ ラ ス \mathcal{O} 原 に 立 つ友と二 人 \mathcal{O} 写真 出 で 来る

言を 思 61 わ 5 61 Þ n 場 な 胸 処 8 ŋ 7 日 過ぎたり

重 ね 来 齢 13 昭 和 平 成 \mathcal{O} 思 61 は る か に 改元を待 0

澄 み わ た る 空に己 れ O来 方を放 9 7 在 ŋ た 改元 \mathcal{O} 時

ル \mathcal{O} 13 か か る 満 月 見 0 0 \emptyset 闇 た だ よう冷気 61 7

身 み る 風 13 吹 か れ 7 並木路を言う ベ き言葉さ が 7 歩

陽 \mathcal{O} 入 (h) 部 屋 深 紅 \mathcal{O} 色 映え 7 シ クラ メ ン O鉢たま わ ŋ れ ば

雲 __ 9 なき今朝 \mathcal{O} 空を 見 渡 7 友 O息子 \mathcal{O} 結 婚 式

双 O翼広 げ 飛び 立て若夫婦わ れ ₽ \mathcal{O} そか 13 喜 び お n

宇 宙 生 活

小 野澤繁雄

H が 上 り 影 が 濃 なる 昼 中 を バ ス が 来 7 バ ス K 乗 る 人 が 61 る

片 あ が 痛 λ で 止 ま ぬ と 61 Ž 人 \mathcal{O} 話 聞 き お り 昼 \mathcal{O} 園えん で は

夏 休 Zx 中 \mathcal{O} 义 書 館 内 に 少 年ら 人 人 12 な n X n

消 毒 0) よう な ること に干ぞ ŋ たる沼 底 に は Þ 青草育 0

宇 宙 が 付 く生活な れ どと金井さ λ 普通 \mathcal{O} 生活 ス \sim シ ヤ ル は な

途 中を 走 0 7 61 る \mathcal{O} か 歩 61 7 61 る \mathcal{O} か 途 中 \mathcal{O} 人 歩 Z \mathcal{O} 先

お さんと お じ 61 さ λ と Oそ \mathcal{O} 間 わ れ は 小 学 生ら 近 づ か ず 61

沼 水 をうご 11 7 鯉 は お \mathcal{O} ず か 5 か た 5 0) まま 13 泥 \mathcal{O} 61 ろ な n

集まる 13 今 日 は 少 な 袁 内 は 木 \mathcal{O} 間 隠 り に ポ ケ モ ン G 0 \mathcal{O} b

前 線 \mathcal{O} 南 下 12 ともなう 涼 風 13 吹 か れ 7 歩 む 秋 O字を読 tr

平成三十年十月

河村郁子

生 命 に 係る ほ ど O猛暑すぎ残っ λ O熱 K 秋 暮 れ な づ

境 内 \mathcal{O} 公孫 樹 OJ. ど ŋ 極 ま ŋ 7 根 方 13 ぎ λ な ん三 9 匹 9 五 0

菩提 樹 0 木下 に羅漢 思し 惟い 像 実 の落ちく るを 如 何 か もせ tr

は 雲出 たら鰯」 と送り れ る銚子 0) 港に 0) 漁

H 本 橋 べ 0 た ら市 13 着 は じ 8 羅 紗 \mathcal{O} オ バ 夜 寒 か ŋ

土とも 焦 土 な ŋ とも 染 \emptyset 0 す 秋 夕 焼 Oさうご λ 向

Ш 腹 にきら 8 橙 O縁 取 ŋ O雲を侍らす今日 0) 富

ヒ 7 ラ O岩 塩 \mathcal{O} 塊 り 貫きしラン プ \mathcal{O} 灯 ŋ 13 寂さ Š る \mathcal{O} 夜

平 成 \mathcal{O} 最後と眺 む る十三夜清 み わ た る 空に 孤 高 \mathcal{O} 光

れ 月尽 の朝に 庭 **X**2 ち O千 両 \mathcal{O} 実 が 色付きそむ

谷垣滿壽子

見 上 げ た る 空 Ł 行 手 \mathcal{F} 爽 道 ゃ 祖 か に

ツ

ユ

ク

サ

 \mathcal{O}

瑠

璃

K

进

ま

れ

神

秋 澄 や 音 先 立 7 7 堰 0) 水

木む 種げ か め か 8 を 見 下 ろ 7

白る

無 秋 旅 61 花 け O \mathcal{O} 5 宿 水 影 寝 れ O覚 曳 7 竜ん め < n 胆だ は ほ \mathcal{O} 甘 ど \mathcal{O} 窓 尚 凜 後 魚 と لح 育 0) <u>\f\</u> 月 0 9 ち 捥 も

思

Š

 \sum_{i}

と

な

Ġ

ざ

る

S.

と

日

鰯

雲

老 13 7 W き た 秋 茜

楽

Z

9

9

古道守る腰に鉈提げ秋うらら

星鴉強力讃え美声なり

強力の名前「熊蔵」竜胆揺る

橅の根は足の守護神天高し続

秋気満つ力水とう湧き水

ブ ナ *7* \ IJ 夕 ケ 白 き わ だ ち 7 き わ だ ち 7

山葡萄かつて疲れを知らざりき

大朝日山頂小屋と月並ぶ

爽やかにナチュラリストの家つづく

水澄みて鉱泉跡の草木和な

小 雨 降る Щ 形 出 で 7 \Diamond ざ たる海 辺 \mathcal{O} 町 \sim わ n 5 が マ チ

Ш 迫 る 小ぉ 国に 飯ぃぃ 豊で を 抜 け 7 W < 卜 ン ネ ル 卜 ン ネ ル 卜 ン ネ ル あまた

時 折 は 台 \mathcal{O} J. 7 煽 5 n bせず ĺ 向 か \sim ŋ 村 \mathcal{O} 町

秋 13 入 n 海 ^ とこころ弾ませて 走 n X わ n 5 内 び は

村 上 \mathcal{O} 静 か な 町 屋 \mathcal{O} ___ 軒 に 飾 5 れ 7 を ŋ 知 り 合 V \mathcal{O} 絵 が

何 十 年 Š り 12 会 Š Š 連 れ あ \mathcal{O} \mathcal{O} 同 級 生 な n 長 月 は 過ぐ

変 は ŋ たる そ れ ぞ れ O面も さ 7 おきて 品品 見 0 9 通 に 喋る

村 上 \mathcal{O} 町 屋 13 屏 風 は 飾 5 n て今住 む 人 \mathcal{O} 穏だ しき顔 ょ

夜 K 入 n 友と O語 5 S 続きた り 何 + 年 を 縮 8 る V と

船 \mathcal{O} ごと海岸線を 走るとき左舷 13 粟 島 0 ŋ と見 W

東京歌会(第七十回)

四 名 平成三十年八月十六日(木)、会場・文京シビックセンター三階C会議室。 (小野澤繁雄、 林博子、 丸山弘子、 松井淑子)。 詠草は各二首十首。 出席者

雨雲のたちまち頭上に覆いくる行く途次にして踵を返す

市川茂子

傘をもたないから、ということではないだろう。さいきんの雨の降り方もある。 踵を返す、の歯切れよさ。行く途次にして、はすでに出てはいるところ。上句はい いえている。

真夏日の人よ 表情の険しくて魑魅魍魎も引きつれ てい

博子

降の重畳するような直接的描写がいい。魑魅魍魎は、さまざま真夏日の人よ、が簡潔。ことしは「危険な暑さ」というコト するとレンガ本になるという。 さまざまな妖怪のことだが、 バが、くりかえし云われ 語源を説明云われた。以

近よればそれだけ退いてしまう人彼はそうなり中の子もそう

小野澤繁雄

は近づいた分(距離)。 上句、そういう人柄。 上句、 遠慮深さ。彼、と中の子(作者の子か)、は場所が違うようだ。 わからないという声もある。 それだけ

コ ンビニの店員名札に「ニヤン」とありやや小柄なり中国人ら

丸山弘子

こがよいと云えるところだが、ニヤン、が中国人らしくない、 こでは、 では、名札を読んでいる。やや小柄なり、中国人らし、も追加的で、作者がみたところ。コンビニに外国人の店員をみることがある。積極的に採用しているところもあるという。 と。 作者がみたところ。こ

水道をだしつ放しで歯磨きをする人ありき古き学寮

布宮慈子

古き学寮、 古き学寮、だから、共同の洗面所とかそういうところでの経験か。昔は水を大事にしていた。 で、 そこでの人の関係に新鮮なものがあった、 ということでもある。

19

東京歌会(第七十一回)

展景 No. 92

席者四名(小野澤繁雄、 九月二十日 (木)、会場・文京シビックセンター四階シル 林博子、 市川茂子、 松井淑子)。 バーセンター和室二。 詠草は各二首十首。

地を舐めて荒む台風すぎし跡そしらぬような今朝の空澄む

市川茂子

ここを後(のち)としたらどうだろうか。 風雨の猛烈さも想われた。 跡、は地を舐めて、から地上の状態を云っているか。今朝の、としているところ、時間の経過で、 われわれは地上の人でもある。このところの台風の

音の 無 13 遠き稲妻まぎれ無く大観は雲間に竜を視ていき

いたんだ、という。視るは、注意して(気をつけて)みること。まぎれ無く、 大観は横山大観。 これが視ることを大観に繋いでいる。大胆で切れあじのある歌。 絵は「龍躍る」か。 音の無い遠き稲妻、は眼前。稲妻に、 は、 大観は竜を視て

クリス マスローズに志摩先生を偲びをり何咲かばひとわれを思はむ

中川禮子

いということが含意されている。さびしい歌でもある。ズの関わりは説明されていない。下句は、じぶんにそんな花はあるだろうか、 志摩先生は佐藤志摩。上句、これは、いくらかは共有される感情なのだろう。 という自問。 クリスマスロー

おおよそはひとつながりにバス停の脇侍の位置に群れて彼岸花

田の畔などに、秋のお彼岸の頃にみる花。 ここで彼岸花は、バス停の両脇にある。 感じが出ている。 死人花を含め別称がもっとも多い花だという。 バス停も都会のなかのものではない。 土手ぞいや、

山形県西村山郡河北町谷地に伝はる奴行列

布宮慈子

うに一気に述べる。懐かしさ、愛おしさ、そういう叙述の手つきがある。 地町は、紅花や草鞋表の生産と集散地であった、という。谷地までを、クローズアップするよ 在所の歌。まだ続いているという奴行列。谷地は、沢、 低湿地に対する呼称でもある。旧谷

21

展景 No. 92

22

席者四名(小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子)。 木)、 会場・文京シビックセンター四階シル バ センター 和室二。 詠草は各二首十首。 出

十月十八日

沖縄 の知事に決まりしデニーさんのカチャーシー踊るを眺めてゐたり

布宮慈子

手や腕の動きがそう。テレビで多くの人の眼を奪った。球踊りで、コトバの意味は「かき回し」、喜びも悲しみもかき回して皆で分かちあう、という。 注意をひいたのだ。デニーさんは玉城デニーさんで、 より親近ないい方。 カチャーシーは琉

力失せしわがたなごころ鑵切りで不ざまに開けるイタリアントマト

博子

安価だという。 缶切りを使う機会は減っている。イタリアントマト、ここでは輸入缶か。 たなごころ、はすなわち掌だが「手の心」の意とも辞書にはある(『新明解国語辞典』第五版)。 歌はある場面のものだが、 生活力にかかわっている。 大ぶりなものがある。

朝食に作り し友は湯気の立つおでんを持ちて小走りに来る

市川茂子

変則なのだ。それでも、 朝食に作りし友、 眼に見えるようだし、小走りに来る、 湯気の立つおでんを持ちて小走りに来る、というところがリアルで、よくわかる。 のところで、おでんなので少し議論になった。朝食におでんというのが少し 一人暮らしだったり、と自在さをみることもできる。湯気の立つ、が も同じようだ。 一、三句、

ギスの花の名聞きぬその庭についやされたる時間も聞いて

小野澤繁雄

だろうか。 下旬に、 ホトトギスの花が話題になったが、ここで作者は、やや納得のいかない感じがあって、議論になった。 その名を花をみてしったという たんに手をかけた、 ということ

敬老の日の招きとぞ老二人姉弟とい Š ゆるゆると歩む

儿山弘子

にしても、 姉弟はきょうだいと読んでいる。 ゆるゆる歩む、 に何か真実味がある。 姉弟といふ、 の説明するような句に賛否があった。 いずれ

(報告:小野澤繁雄)

二〇一八年 夏のある日

朝食のあと、 六時三十分からしたこと。

りする。 庭に出る。 夏はそこいらじゅう蜘蛛の巣が張るので、 シュ 口ぼうきでからめ取りながらひとめぐ

特にポストの周辺、 顔にまとわりついた時の感触は何とも言えない。 西洋ガシワや百日紅の植わる庭の先端はすごい。 うっかり忘れて無防備に通

ついでに温室の窓も開け放つ。 朝のうちは山から吹き下りてくる風もおだやかなので、 大胆に開

庭の片すみで、 盆栽の水の渇きを確認。夜中に風が吹いたので、すでに乾いているものもある。 母の好きなむらさき。 母から譲り受けた中国草ボタンのうす紫の花が、 これを生けて母の写真の横に飾る。 房状にこぼれ落ちそうに咲い 7



て特別暑くなるので、 ったことのひとつ。 H が高くなる前に、 ようやく実行できて、 温室脇のトサミズキの枝の徒長も整えておこう。 朝のうちに済ませる。 景色もすっきりして気持ちがい 気になりながらも後回しになっ 日中は温室の窓に光が反射 61 0 なかなかできな

た気分になったり、 そろそろ八時になる。 時間の感覚は日によって、 八時まであと十分あると思ってみたり、 時によって異なる。 もう八時になってしまうと、 急 11

ブラー 台所に戻って、 トに包んで冷ました白湯でのむ。 麦茶を煮出す。 やかんが沸騰するまで 健康維持の ため 0) のあいだ、ニンニクをおろし金ですって 毎朝の習慣。

キュウリとナスを漬ける。 で帰ってしまう。 みそしるとキンピラを調理。 なかなかお礼が言えない 外壁に野菜を並べている時に気がつい お向かいさんは知らないうちにそっとコンクリ か床から大根とニンジンを取り出 て、 あわてて外へ して、 お向か 飛び出す の外壁に朝採り 11 さん っのだが、 から Ó 11 野

13 ている。 台所仕事をしながら、 ナ・シモンの Here Comes The Sunをかける。 ここのところ毎日

ス 最後に従兄弟の コナー 同様、 共通の思 初ち P んを訪 13 出 ね おもやげに持って 11 ったCDだ。 ナ シモンも ク ij

· ネ

エ、

いネエ

つ

て喜んでくれた。

くなる。 輝きに満ちた世界を信じたくなるようなうた、 三曲目の O-o-h Child がはじまると涙が止まらな

でめまいが止まらず、 昏睡状態に陥 ったと連絡をもらったのだけ 駆け つけることのできない間に逝っ れど、 もう一 度あ てしまった。 13 たかっ たけど、 先月のこと。 メニ 工 ル 病発症

今頃どこで何思っているのだろう。 私のことも見えてい のかナ。 初ちゃ 私、 ナで貴方

を送ります。お幸せを願って……。

7じも……。7。草とり、盆栽の水やり、虫退治、棚のそ7。草とり、盆栽の水やり、虫退治、棚のそ昼食の下ごしらえも完了。サァ、庭に出よ



玄関の出窓に豆鉢のイタドリを飾る

Photo / Kato fumiko

イカ イギ ユ ウの 化石発見から 40 年

ヤ

マガタ

ダ

ふじを

立ったのがヤマガタダイカイギュウの をも 0 とに、 L で み いる大江町は来年町制施行60周年を迎える。 んなで楽しめる絵本を制作 「ぷくちゃん」 しようということになった。 である。 そこで、 記念として大江町にまつわ その題材とし て白羽 0) 矢が る題

る大江町では 13 たとされる大海牛である。 マ ガタダイカイギ 「ぷくち やんし ュウとはあまり聞き慣れない言葉だと思うのだが、 の愛称で親 40年前に最上川の河原からその化石が発見されており、 しまれている。 8 0 0万年前 私の に生 住 息 h で 7 W

た。 たちにヤ しはる先生 まずは、 マガタダ 絵本を制作するにあたって、子どもたちの発想をもとに筋書きし、 (鶴岡· 市出身) カイギュ が一つの話にまとめるという計画なのだが、 ウの話をし てくれない かと依頼がきて、 30分ほど話をすることにな まずは私に小学生の子ども 絵本作家の 0 ちだよ

年生から6年 まって億単位で進む時間の尺度があまりに大きすぎて、 てて話せば 億年前 歴史は好きな方だが、 11 0 地球の生い立ちからスター 11 生までを対象に分かりやすく話すとなると、 0) か自分でも分からなくなって 原始時代以前 のことはほとんど知らないの して、 しまった。 ヤマガタダイカイギュウが現れるまで45億数千万 戸惑い これがなかなか難しい。 しかない と同然で、 のが本音だった。 地 どこに焦点を当 球誕生から始 それを

歴史など鼻くそみたい の歴史を、 そこで地球カレ 0 地球に 3 6 5 首の あ ンダ 0 て、 なもので、 1年分のカレンダー なるものがあることを発見した。 人間など極々微々たるものであることを痛感 地球誕生から人間誕生までの歴史はそこはかとなく遠く大きく で表したすぐれものである。 地球の誕生から現在までの46 これを見ると、 7 うまう。 億年 人間誕生の -の地球

事であることにはまったく驚かされる。 産業革命が起きて世 の中 は大きく変化したが、 その 産業革命など年が変わるわずか 秒前 0 出 来

2月9日 1 月 日 陸と海が生まれる 午前〇時 地球誕生 41億年前 46億年前

2月25日 最初の原始生命が誕生 39億年前

11 11 月 月 20 6 日 日 寒冷化と温暖化を繰り返す 7億年前

魚類が現れ 5億年前

12月13日 恐竜が現れる 2億5000万年前

12月19日 鳥類が現れる 1億8000万年前

12月26日 恐竜が滅びる 6600万年前

12月31日午前10時30分頃 ぷくちゃんの時代 800万年前

12月31日午後11時00分頃 人類の祖先ホモサピエンス誕生 50万年前

12月31日午後11時59分 文明の誕生 1万年前

12月31日午後11時59分46秒 イエス・キリスト誕生

12月31日午後11時59分59秒 産業革命(200年前)

0 るところも全域が海の底にあった。 中に山 が突き出ているような地形が出来上がった。 5 Ŏ 0 万年前頃、 東北地方のほとんどは深 その後、この海のところどころに海底火山 い海の底に沈んでおり、 現在の の爆発が起こり、 Ш 形県にあた

米沢にかけての一帯が広く静かな浅い海になったのである。 0 万年前頃になると、 地盤が隆起して海が少しずつ浅く な つ 7 61 つ た。 庄 丙 か 5 庄 山

ŋ そして8 茂る昆布などの海藻を食べて生活していたと言われてい 0 0万年前頃になると、 その静かな海にヤマガタダイ る。 力 ユ ウが生息するように な

5 頃になると、 地盤の隆起はさらに進み、 日本海と陸地は切り 離され て、 山

なった。 新庄のところに凹みができて湖になって その の最後 の名残が 南陽市赤湯の白竜湖だと言われている 13 った。 その湖をつなぐように最上川 が流 れるように

を助けるのに大いに役立った。 ならなおさらという感じだが、 かで広く浅い海だった、 「ぷくちゃ の姿を想像できるように話を進めてい と言っ 中には ても大人でさえなかなか想像できないところがあって、 畑 から出た貝の化石を持 ったのだが、 つ 7 今から 11 るなどという子も 8 Ō Ō 万年 前、 子どもたち 11 て、 山 形 理解 は 静

近くに、 海である名残を理解させようと努めたところである 町海味とか白鷹町貝生という地名があかいしゅう ったり、 南陽 市赤湯 0 白竜 湖 0 写真を見せた

れるジュゴンの先祖にあたる生物であった。 牛は新生代第三紀に生息してい た、 あ のアンデル センの 「人魚姫」 0) モデ ル になっ

発見した。 藤正弘君は最上川に釣りに出掛け、 今年と同じような渇水に見舞われた昭和53年8月21 二人は学校の先生に話をし、 岩に突き刺さった背骨とそれにくっついた肋骨で、 近く 学校では県立 の橋の上流約 博物館に連絡、 1 0 0 H 大江 m の岩盤に動物の化石の .町立左沢小6年生の渡辺政紀君と斎 一瞬恐竜の化石ではな 調査が始まった。 ようなものを かと思 つ

型動物化石であること、 査では、 2 メ ル 四方くらい ひと雨来たら水没してしまう可能性があることなどを考慮し、 の範囲に大きな肋骨、 脊椎骨を確認 Ļ クジラら しい貴重な大 緊急に発掘

31

石を含んだ大きい ク車で持ち上げ、 8月30日、 当時の建設省山形工事事務所の許可がおり、 その日のうちに博物館に運んだ。 ブロ ックを発掘した。 途中、 雷雨に見舞われたが、 大型削岩機を使って岩盤に穴を開け、 岸まで土ゾリで運び、 ユニ ツ

(咬合面) タガネを使い岩石から化石を掘り出すクリーニング作業中に、 ひょっとしたら新種のものである可能性も出てきたが、 がす り減った臼歯が見つかり、 クジラの化石ではなく草食の大型海生動物であるら 決め手はなかった。 黒いエナメ ル 質の 歯 0) 噛み 合う面

な化石の発見であり、 牛の中間の種であることが明らかになり、 ことにした。その結果、 海牛化石研究の世界的権威、 ヤマガタダイカイギュウと命名された。 この海牛から見て先祖にあたるジョルダン海牛と子孫にあたるクエスタ海 アメリカハワード大学のドムニング博士に鑑定を依 海牛の進化の過程の謎が明らかになる世界的に大変貴重 頼する

に、 何も覚えていないと語っているが、 へ行ってはい 渡辺さんと斎藤さんは、 大変な発見だったんだなと次第に分かってきたと当時のことを述懐してい けないことになっていたので、大変叱られてしまった。 学校の先生に化石の発見を報告したところ、 新聞記事になったり、いろいろな会に招かれたり 子ども、 規則で子ども 心に叱られた以外は たち同 しているうち 一士では

良かれと思って先生に話したばっかりに大目玉をくらった渡辺さん、 斎藤さん。 教師とい うの は

を褒めてほ そういうところがあるよなあと、 しかったというところなのだろう。 私も教師の端く れなのでそう思ってしまうが、 まずは化石の発見

自然との関わりや遊びの中には、子どもたちの好奇心を掻き立てたり、

思わ

ぬ大

考えてみ

れば、

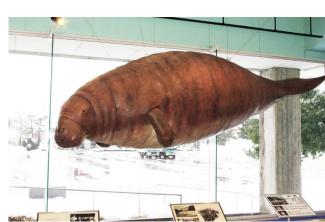
まうの りを掛けてしまってきたのではと思っ 発見があったりする。 危険と隣り合わせとなりがちで、 体験を伴う活動にこそ生きた学びがあると思うのだ 学校ではどうしても座学中心になってし 大人の都合から随分と縛 てしまう。 40年前でさえ

そうなのだから、

今の時代は何をか言わんやである。

上中下」 山形新聞 広報おおえ№691 (2018年8月30日~ 「ヤマガタダ $\widehat{\stackrel{2}{0}}$ イカイギュ 18年9月) 9月 ウ40年目の目覚め 1日)

写真提供 大江町教育委員会



33

十月 0

望む仕事も日本と同じ、 を申しこんだ。 の見送りも断 二〇〇五年六月、 励ましたかったのだ。 ŋ さっさと発って行った。とはい 女は自分で見つけ手続きしたセビーリアの街、 思い なかなか見つからない。みやげ物屋の売り子をして細々暮らす娘に会 たってわたしは近畿日本ツー え、 住みつけば胸に描いた場所とは大分ちがい、 リストに 「ポルトガ 語学学校と住居に、 ル ス ペ 1 二年前、 ・シ十日 の旅

旅行会社も娘の三日分の費用をもらえば、 けて飛行機は、 たしも三日くらい休みをもらってツアーに入って歩くのがい っちこち、 いろんな所に連れてってあげ オ ンジ 紫 · ピン クのまじる美しい 問題ないと言ってくれた。 いたいけ بخ タ焼け 時間 がない の燃えたつ空の下を、 61 んじゃないかな」と、 . の。 かくて二十四時間以上飛び続 ツア ーで来てく 1] 娘は言 スボンの大地 'n n ば、 った。

にすべりこんだ。

た。 れに ご馳走を食べさせてやれ 見したという宮殿の中を回ると、 はそこでツアーを外れた。部屋に行く暇などありようはなく、 に入って行った。 そこに何 界の果てと信じて目路はるかに拡がる大西洋も水平線で滝になり、地底に流れ落ちると信じて ないと同じ。 でまっすぐ口 ホテ いながら、 早く着い ルー 空はみごとに青か ルにわたし達を運んできた。 ヤ 大聖堂もろくろく見なか カランダの紫の花がどこの並木にも満開だった。 ムキ が 黒ずくめの男性グル 11 わたしは若い時からロカ岬にあこがれていた。 カ岬に行った。 たのでリスボン市街を歩き回って るかはわ を渡 娘とわたしは休みなし った。 からない。 明日の予定の説明を始めた時、 て、 夜はポル わたしは嬉しかった。 ポルトガルではスペイン語があっさり通じる。EU った。 ープのファドを聴い ロビ バスは国境を越え、 今日は大西洋の海原に船影はなく、 ランチをしながら皆さんにい トガル料理の ーの一画にツア のおしゃ いたそうだ。 べり た。 レストランでワインとおい オリーブ畑のあいだを一路アンダル で観光はだい 次の日は大急ぎで天正少年使節 回転ドアから娘がとびこんで駆け寄 全員が集まり、 バスはさっさとメインス 大昔、 翌 日 娘は の自由行動で、 日日 ろ たい 涙目になっ 61 灯台のまわ 添乗員の ろなことを聞か ロッパの人は、 一の空、 7 いり セビー 13 娘とわたしは のおかげで国境も 小山さんがそれぞ たが ŋ タラ料理を味わ IJ も人は この岬 れ笑 リア が 1 シア地方 女王に謁 0 13 見えな いってき 大きな ろ 0 13 きん が世 バ ス

35

勤め 座ることになっ き明る 数が 0) 休みをと 少ない から 連れは家族とば 計十六人だった。 61 女性。 わたしは ってきたとい 11 旅行仲 きお 偶然にもわたし達は三人とも七十五歳だった。 ツア つ 11 そ 間は お か り話を う旅行好き話好きの男性二人。 0) の完全な一 Þ 夜 定年を過ぎたら ベ の食事も踊り 、り役は 食事も 員にな わ たしである。 しい夫婦四組 も超豪華なフラメンコパ つ た。 添乗員 自然とわたし達三人は食事は同じテ さっさと二人のことを聞き出 残りの 、障害のある娘さんを連れた三人家族 0) 小山さんはたぶ 珍しくもないことだが 高齢者はわ ーティ ん三十を過ぎた、 たしを入れ でわかっ 1 たことだ 7 ・ブルに

はなかった。 っと行 日 乳 沢さ やはり 勤め とお金があるん つ h てみ わたしは山形市に長女と住んでい は中肉中背、 これまで行ったことがない 0 7 たい 男性は共通し 一人暮ら 17 た。 国だったりするから、 奥さん ĺ Š つ てい ただ不思議なの 奥さんはなくなった。二人とも海外旅行には二十回以上行ってるら をなくしていた。 くら るみた た顔でい から来てみたとい 61 だったが かけ持ちで娘に会いにきました、 は、 て、 つもにこにこしてい 相田さんは薬剤師で病院勤めだった。 二人ともポルト 四年前に夫をなくした。 実はち うことら っとも似てい ガ る。 らいり ル にもスペ 横須賀市で一人暮ら なか ス ツア と自己紹介 ^ った。 イ イ シも 参加者の ンにも大 世 ポ 沢さん 田谷 ル 半分も て関 Oガ そこ マ ル

動 0 する親切な 着く か が 早 人だが あとはわ 11 か すら 力 から メ ラをかつい ŋ ない と長 人であった。 で消えて 見ダン しまう。 デ 1 な相田さん 食事で 11 は笑顔がなく誰とも話さず、 つも一緒だから悪い 人でな 67

気づい う場所 て行か 背景にも中 さんは、 た大聖堂が ć ・った。 0 た。 れた。 を半 8 7 昔から IJ 5 洲に す Ė ア たしが迷子になったり 0 か たしも、 出発しまー 0) 11 つ にも緑の 翌日は 人が通 なく くと見える。 そうな け 先 皆さん なっ で回 0 な 街 樹々 のだ。 た ったっ ただただ恥ず 0 ŋ, とホテル 0 がどやどや現れ すと小山さんが呼 T てしまっ だろう。 、が茂っ コ ン て、 うっとり 皆さんの ル ダ K ル \mathcal{O} てい ЛÍ た。どうしよう。 バ シア 一言も話せな 名も の二千 か に落ちたり た。 ジ 0 しくて頭を下げ、 あとに わ た。 て眺 世界的観光地 は たし À 遠くに霞む家々 年前 しょ 五. 8 0 でいるのも気づかなかったわけである。ここが は 一分ぐら 0 したらと考えて死にそうだっ つ いて歩けば大丈夫とば てはっと見廻すと橋 \Box 聞 5 11 昨日別れる時 B 十分とた マ て うだが グラナダ 時代に造ら 13 下を向 13 歩い なか の白壁、 た所 っては った。 困る 0 13 の娘 n 7 1 その た美 0 13 0 11 スラム国王 他 はた なか か 上に が不安そうにして n 0 思っ 人達 61 が 0 は に 1 わた たと思う。 誰 1 たと思う。 7 口 \mathcal{O} が 7 スラ ように 建てた ・自分だ しの 11 61 マ た。 な A 寺院を改装 を見 V 蒼ざめ 面 メモ あ 0 な 11 0 T た顔 倒 13 ル くことに は 何 *7* \ た小 を思 置 \mathcal{O} ブ

からである。 く使えない でいると、 荷物は持ってくれる、 すぐ来て開けてくれる。 探し物をしていても、 ありがたいこと、 すぐ見つけてくれる。 この上ない。 ル ムキーがうま

沢さんが散歩に誘ってくれた。 ていた。 人がぞろぞろ歩い 一つだけぼ たが出てみることにした。 口 ーマ橋失敗の夕方、 んやり点い ていた。坂になっている通りを降りて行くと暗い海岸に出た。 てい 着いたのは、地中海沿 る。 街 明日の朝も早いから、この街を歩くのは今しかない。 ベンチがあったのでわたし達は寄せては返す波の音をしばら 0 両側の店やアーケードの天井、どこもさまざまな色の灯り いの有名な避暑地トレモリノスだった。 地中海だ。 十時を過ぎて 夕食後、 が輝き、

「異国の 地中海の い浜辺で、 知ら ない ・男性と波 の音を聞い てるなん て素敵

わたしは少し笑って言った。 彼は黙っ てい た。

かしく恋しく思ってい 夫ならこういう時、 た。 必ず気の 利 いた言葉を返すのに。 わた ば 心 0 中 で、 夫の言葉の幾 つかを

であること、 日一緒に歩いているおかげ 同時代を生きてきたから、 で、 北沢さん 大連が地図のどのあたりか、 のことは大分わか 0 た。 満州 すぐわかる 0 大連か 5 0) 引き揚げ

「アカシア の街ね」

みましたか」

^, や 名前知ってるだけ」

に姪っ子を連れて行った。 奥さんを癌でなくした。子供はいな 一人ぼ っちでない 13 0 一人住まい んだ。 嬉し だが、 V, 隣に妹の家族がい ほ っとする話だった。 る。 二年前、 プ

小山さんが笑いながら言った。 がも終わ! ŋ に近 かった。 あ れは で 0) 自由 時 間 だったろうか。 H λ な出払っ 41 員

「河内さんと北沢さんはご夫婦と、 たい て 11 0) 人 が てますよ」

「わあ っ、面白 13

わたしは声をあげ、 北沢さんは相変わらず黙って V3 る

「あたしまだ三十三なんですよ。なのにまだい たしかにツアーでは初日か二日目ぐらいで仲良くなってい てきたことだろう。 ただし二十代から五十代までぐら い人に会えな 6 つも一緒にいるカップルを、 13 11 0) 人達か。 たいどうなってるんですかっ」 七十五歳同士なんて見 彼女は何

つ

たことないだろう。

「そのお年で、 どうしてそんなにもてるんですかっ」

ンが少し高くなってきた。

「大丈夫。あなたなら、ちゃんと良い 人に逢えるわよ」

わたしも少し哀しくなった。 無責任な励ましだ。

そう、 頑張ったらい

北沢さんも優しく彼女の肩をたたい

うのが、 らないようだった。 しくなったつもりでも、 レスを書い ŋ Ú ツアーのならいだ。 バ ル てもらった。小山さんは別として二人とも、わたしがアドレ セ 口 礼状出したって、 ナ 成田でさよならしたとたん、 - 成田間の直行便だった。 わたしはそんなのは嫌いだから、 返事はこないに決まってい これまでのツアーの記憶では、 道で会っても誰だったか思い 手帳に小山、 る。 スを聞くなんて思いも寄 北沢、 旅行中 相田、三人のア 出せない かな とい

2 予想外のことがやってくる時もある

それでもわたしは三人にハガキで礼状を書い 長女と二人の日常がまた戻ってきた。 次女の た。 バ 楽しかった旅のお礼だ。 イトは、 お茶屋に変わ った。 相田さんはピンとこな 自分の仕事もある。

終わった、 だろうが。 いたみたいな面白くない文字と文面だ。 相田さんから突然ハガキが舞い込んだ。ピントの外れた文面だ。 夏が終わり秋も過ぎようとしていた頃、 メール文字とも違う。 いつも気むずかしい表情で話らしい話もせずに 定規を使って一字ずつ

わ しは効果あるかと、 清涼 ないようです。 の候になりました。 中国は 夏はスペインに参りましたが、 いかがでしたか。御健勝を祈り上げます。 小生鬱が長引き御返事が 役にたちませんでした。 おくれましたこと、 御詫び申 あの地は し上げます。 小生には合

はニュージーランドに行くとのこと。 話ししたいから連絡して下さいとも書いていた。 人のハガキとカンチガイした。土下座してお詫びしたい、 国旅行の折、 緒した者です。 しは思わず笑い、彼が妙な人物でないことにほっとした。彼は今度の上京の折は是非お会いしてお 何でだか一拍ずれ 年賀状の余白に一筆書いた。、カンチガイしておいでのようですが、私はスペイン 上海のとある食事の時、 御健康を祈りますべ。 てい る。 ほうっておくことにした。 今回の返事は早かった。 彼は元気で何よりだ。 中国で働いている夫に会いにきた女性と少し話をした。 あの一週間のあいだに、 年が明け、 と。 相田氏の鬱が気になっている。遅れば 大げさだがまともな文面。 若くて綺麗な女性だったのね。 北沢氏から年賀状が来た。 わたし達は一度も直接話 ~去年の中 の旅で御一 その わた

41

さらに

すと隣家の窓に届くほど家がたて込んでいた。 が遠くなっ 相田さんの番号が目に入った。 の宿舎に泊まっ 一年が過ぎた。 ているようだ。 て大騒ぎし、 わたしは女学校の関東支部同窓会に出席 考えもなくダイヤル 翌晩は江東区の息子達のアパ 当日現れなかった人に電話するつもりで手帳を開 した。 彼が出るまでしばらくか ートに行っ その夜は昔の た。 窓から手を伸ば シクラス かっ メ た。 耳

にかけ い顔をしたが、 ジばかりするが、 彼は懐かしそうに、 てるみたい。 明日は土曜日だから妻と二人で深沢のマンションまで、車で送ってくれると言った。 どこに行っても誰かと仲良くなるたちの母親を、 多重人格? 明日お昼をご一緒しましょう。 まさか。 スペインで知り合った人と言うと息子は少し釈然としな 何なら息子さん達も一緒にと言う。 子供等はよく知ってい

男の 氏の住む六階までエレベーターでついて行く。 相田さんはマンション玄関の前に立って待っていた。 住居はピカピカだった。 世間話をし、天ぷら定食をご馳走になり、 助手席に相田さんが座って二子玉川駅前の和食食堂に三人を案内した。 居間兼客間でわ たしは感心して足が沈むほど厚い こういうところに住んでいる友人・知人はわたしにはい 4LDKというのかしらん。築三年、 彼らはさっさと帰って行った。そしてわたしは相 息子のつれあいは後ろの じゅうたんや恐らくチェ 相田氏と息子は大人 わたしの コ 製の美し ない。二十畳 冷暖房完備と 傍に ガ \mathbb{H} 0

と自分の人生を語りはじめた。 0) 花瓶 を眺めた。 もったい ž った様子はまるでなく、 お茶を一 杯出すと、 彼は飾り気無く淡

「僕は名古屋生まれです。親父は材木屋でした」

たね。 「わたしの記憶にある昭和初年の材木屋さんは大きかったとは思えな 帯の数軒の借家の持主だったし」 11 け お金持ちのようで

物とか古い屋敷を見るのが好きです。 上等の材木を仕入れる力があるのが一番の材木屋。 「親父は大きい材木屋でした。戦前ですから貴族院議員とか大地主が家を建てる時、 環境でしょうね 僕は今でも柱の木や長押の木組み、 和歌山 0 0 n

知らな い世界で や人への好奇心が湧い

死んだの 残ってな かしくないですか」 「兄弟は兄と僕の二人。兄は二つちがい。母は僕が生まれて間もなく死んだと聞かされてきました。 は い。父親、 本当です。 雇 うちの墓に名前、 13 親戚、 一人として生母につい 生年月日、 命日、 戒名、 て僕と兄に語ってくれた人が みな彫ってある。 しか し写真一枚

11 です。 どんな訳があったんでしょう」

妻になっ 「僕のところは面食い 7 いました」 の家系でしてね。 物心つ 13 た時 は、 美 人の元芸者が美少女の連れ子を伴 61

43

れ

44

自分を相手にこういう身の上話を始めたのか 「僕の一番古 11 記憶ですけどね、 家族が食卓を囲 んでる Ã べです。 やっ と歩け るぐ 5 13 0) 僕 が 外側

立って見てる、 なんでしょうか Λ, ,, こっちにおいでと誰かが呼んでくれるのを待ってる。 や違う。 リアルな思い出だ」 でも呼んでくれ ない

「切ない 哀しい思い出ですね」

兄が怒られ折檻されるのをいつも心を痛めて見てましたね」 「でもやんちゃな男の子の 兄はもっとひどか つた。 僕はおとなしくて、 そんなに 悪さは で

はいて、 にしかなかったように思う。 昔はほとんどの家が子だくさんだった。 金持ちの坊ちゃんだったおかげで。 親はよく子供を怒鳴ったり殴ったりしていた。 十歳前でも相田次郎さんの方がはるかに深く醜 わたしの遊び友達の中にも子だくさん 可哀想に。 しかし陰湿な継子いじめは芝居か昔話の 17 人の世を知 の上 貧 つ 7 11 家族 中

ところに目をつけて利用されてただけなんですが」と次郎さんは言う。 長ずるに及んで兄は不良少年、 そしてやくざの 仲間になった。 「親父に金が 方、 であるか 次郎さんは私立 ら、 0) 0) 13

代だったかも。 校にも通った。 学校に行き、学徒勤労動員や名古屋大空襲を生きのび、 ろ好きなことに手を出したような口ぶりだった。日本映画の全盛期でもあった。 が、岐阜薬科大学に進み家を出た。 そして恋愛。 剣道、 あ 職場の病院では民社系労働組合の委員長になった。 ぶじに薬剤師になり、就職。自立し、 父の息子だからや は 京都大学法学部受験はうまく n 相手の 方は美人だっ やがて東京に移り たんです 一番輝いていた時 だからシナリオ学 17 かなか いろい つ

「ただ彼女は僕の友人の妻でした」

漱石の 『それから』みたい。そこだけ

田さんが奪ったの

「というより、 わがままで浪費もひどくて、 僕は友人が彼女と別れるための相談相手でした」

「その女性のひどいところは洗いざらい 知ってた。世 の常の恋愛とちがいますね」

られるところから借金しまくって、どこからも相手にされなくなってたんです。 か抱えて彼女がしょんぼり立ってた。 「そのはずなのに、そうならなかった。そういうもんでしょ。 これを担保に千円貸してくださいませんかって涙を浮かべてる。 二時間ぐら い待ってたらしい。 ある晩、勤 抱えてたピンクの兎の縫い めから帰ってくると、 その瞬間、 哀れでした。

ごの女を助けられるのは、

俺だけだヘ

つ

て

「そういう瞬間、 人生にはありますよね。 わたしも身に覚えがある」

そのあとは聞かなくともわかる。

は結婚し、 堅物 の夫と、 何でも欲 しくなる妻は 喧 嘩 0) 絶えない 夫婦になった。

「かたぎの方だったんでしょ」

第ぶ もそろえて並べてた。 「銀座の松屋デパート つけてくる。 0 て息子は 僕は 猫に鰹節。金の使い方で喧嘩になると、 11 一つずつ拾って並べるんです。 の職員食堂の栄養士 つも泣きました。 でした。 ただ悪いことに、 (ほんとかしら。 彼女はそばにあるものを手当たり次 松屋は流行最先端の品を 信じられない)、ママを 13 じ 0

るなって言うかしら」 「あなたが DVの夫だったとわたしは思わ な 11 0 でも全く無抵抗の 父親に、 六年生の 息子 が 13 8

も開い の傍の 「あの夜も組合の仕事で、 てる。 小さい 家を僕達は借り タオル一枚残ってなかった」 帰 てました。 ってきたの 遅い は、 夜中でした 時間なのに家じゅう電灯つけっぱなし、 た。 元華族が: 使用 人 家を住まわせ 玄関も って 61 0 た 門 戸

「手伝った愛人がいたんですね」

「それはないです」

固としていた。 親子二人だけで、 そんな出 て行き方できるも 0 か。 でも 0 7 61 7 W

『話が鳴った。わたしの息子が迎えにくるのだ。

「いろいろお話できて、とても楽しかった。三日間だれとも話さないことが多い んです。

ぞいらしてください。 お隣にどんな人が住んでるかも僕は知りません」

「そんな暮ら しを続けていかれ たら、 どうなりますか。 お友達はいない んです か

八十歳ですからね」 「いますよ。 ただみんな遠 61 0 会うの は 年 一度 0 同窓会だけ、 そ れも ぼ つり ぼ 0 ŋ 減 0 7 V)

哀しそうだった。わたし の同窓の男子だって同じようなものだ。

暗くなるまで、これまで会ったこともない相手に、 長いあいだ、 継母、兄、元妻を語る なのだ。 相田さんは話す家族も友達もい のに怒りや恨み、 憎しみの言葉は一言も言わなか なかったのだ。 彼が話をやめ この なか 人はぜ つた理り 曲がす った。 λ ぜん とんと にもか 人間嫌 かわら 0 で み込 は

「これから、時々お電話しますね。お話聞かせてください」

詁しているうちにブザーが鳴った。

47

八十代の

人間、

六年

間、

たし達

は

<u>カ</u>

しはやっと三回、彼を訪ねた。

親が親権者で父親が養育費を送る、

一日も遅らしたことはない

の食事を楽し 日には、 「本人がその気なら大学に行かせたかったんですが、 、ました。 毎年銀座で三人で食事することになっ みにしてました。 でも息子は ね てました。元・妻は名の通ったホテルの 『ライスカレー その 気はありませんでし で 11 な、よ、 町 の食堂で』とい たね。 ただ彼 V ス \mathcal{O} ・ラン 誕

「良い子ね」

わたしは感心した。

暮らしていたが、 高校を出ると、 実質、 葬儀を出 彼は ある日留守番をしていた元・ したの 日 は相田氏である。 カド に勤 がめた。親子は武蔵小金井に小さい 妻は、 この二人どうなってるんだ、 急性心筋梗塞で急死した。 と思い マンシ かたちは息子が喪 ながら、 ョンを買 0 7

氏も元・ で生きてきたその まで見せられ しは綺麗に貼られた葬送の写真、 わ 妻も再婚ある から た。 な 彼女は日本風の美人のようで、二人とも嬉 人の面影からわがままで金遣 13 13 は復縁しなかったのだろう。 おまけに、 はるか前 13 の荒い人と わたしには謎であった。 の二人のハネムー いう印象は伝わっ しそうだった。とにかく、 ンで伊勢神宮で撮っ てこな 男と女の 61 息子と二人 つなが なぜ相

寿司をご馳走 東日本大震災の前 してくれたあと、彼は遠慮がちに言った。 の年だったか、 二度目に訪 ねた時、 彼は かなり足を引きず つ て 13 上 0 お

んのです 「お近づきにな 、ます。 が 何かプレゼント差し上げたい つ てたくさんお話しできたこと、 んですが、 こんな楽し 何が 13 11 ですか。 い老後が僕に 何が 11 11 P か つ 僕はさ てきたことに っぱ ŋ わ か 11 7

でもわたしは生前、 痛くて身につけられない やお 経痛に五年以上悩まされ や、 どうせ彼は駅 夫が買ってくれた並 前 に並ぶデパ 衿の の値段 あ] る 卜 ブ で、 ラ 0 T ウスやセ P クセサリ ク ヤサ ij タ 1 で十分なのだ。 0) 何 まし かを、 てネッ と考えて クレ おまけに帯状疱疹の ス 11 ゃ る \sim のだろう。 ン ダン

11 び つ くり。 ただずうずうしく言わせてい ただけ ń ば ね、 前から大好きだったんです、 そ

け

50

よう一筆書い

アンテ

イ

・クド

形だった。こげ茶色のビロードのドレスの上にオレンジ色、 は高さ三十七 「わかりました。今日お持ちになれば っている。ウェー が知り合っ ンチの目もとの涼 ブしたこげ茶の髪に白っぽい帽子。 の相手にそんなこと言うか。 1, 少女がヴァイオリンを持ち、 いい」と、棚のガラス戸を開けた。 どっちが先に 相田氏は案の定けげ 裾をレースでふちどった短い上着を羽 死 D 弓を構えて立 かだっ 7 んな顔をした。 わ から 一ってい な VI る \mathcal{O} 西洋 す 人

いますぐなんてそんなー。 とても高い ものじゃない かな。 二十万ぐら

「まさかね、そんな高い もの 僕は買い ませんよ」

十万円?」

「忘れたけど、 そんなとこだ ったかな」

勢丹の包装紙を出してきた。 にしたって、あっさり もらえる金額ではな 13 彼はさっさと薄くやわら か 61 白

きて、その帰り、わたしを仙台の三越に連れて行った。 四〇年、 おもちゃ売り場と隣の 若い時、わたしの 人形売り場に、 父親を熱く慕 恐らく戦前に仕入れ 0 7 いた田村 あらゆるぜいたく品が姿を消 さん لح 高過ぎで売れ残っ 13 う男性が青森から父を訪 してい 7 たらし た時代 ね 7

来てい 思っていたこと。 美しいドレスでブロンドの巻き毛、青い眼の人形だった。 五十センチもある西洋人形を、 もちろ る。 こんな高いものを小父さんに買わせて(たのんだおぼえはない)叱られる、叱られる」と 知っていれば有名作家手作りの人形展や、 ん買ったことはない。娘たちも母親の人形好きを知らない 何年もたたず人形は灰になった。わたしのぜいたくな西洋人形好きは、 小父さんはわたしに聞きもせずさっさと包ませた。 もちろんアンティー おぼえているのは、「どうしよう、 クの 西洋 見たことの 人形展を見に行 どう な

わたしは 厳重に包んで持たせてくれた人形を見送る時、 いまだに、 相田氏がこの高価な骨董人形を欲しくて買った理由を知らない 相田氏は「娘をお嫁にやる気分かな」

田 氏 0

きなかった。 3 になっ 大昔から悩み苦しみ ても相田氏 にとりつ Ú 人間につきもの 11 て離れない悩みは だが、 そこを突き抜ける老人もたまには 兄 であった。 話のたびにその悩みが出 いる。 彼は で 7

ぬ ぐ、い 相田氏は言った。 に、 指のない 若い 恐ろしい 時、 連中に父から預かった万札の束をたたきつけた。だが父は兄を勘当し 自分は何十回も東京と名古屋を往復し、 父の実印を盗み出 の尻

二人が死んだあとは、

女でも

なかったし、

裕はない、これが最後と思ってくれ、あとは何を頼んできても断る、と書きながら送金してしまう。 家賃を三ヵ月滞納して立ち退き令状がきた、よろしくお願い 兄がここまで長生きするとは思わなかったことと、 父と養子縁組をしていた連れ子の二人が遺産の半分以上をとった。 九十五歳 り合って五年もたってい いで父の正妻の継母は、あれほど父を苦しめた兄はビタ一文もらう権利はない、と強硬に主張 力 の他人は呆れているばかり。 った。 でなくなった。 その時、兄の老後は自分が引き受けようと覚悟した話はウソではあるまい 親孝行の相田次郎氏は、 ない Ļ 良い知恵のあろうはずがない。 父をよく温泉に連れて行った。 弟と住む気のないことだ。 彼等の父は長命で八年だか前 次郎氏も二人に反対することは 遺産相続の話し合

催」のポスター 大井町駅前の幕屋主催とあるので行ってみた。 した次郎氏は海外旅行の魅力にとりつかれてい が電柱に貼ってあるのを見た。 旅行会社の「イスラエルツアー」は聞いたことがない。 事務所員の応対に胡散臭さはなく、 た。 ある日 「イスラエ ル 周

に安い。

「幕屋って知ってますか」とついでに聞かれ

教じゃないですか」 「ちょっとだけね。 エ ホバ の証人やモルモン教みたいな知名度はない け キリスト教系の新興宗

多く、和やかな気持ちい 次のような話だった。 彼はさっそく申し込ん 一回おつきあいの つもりで、出かけた。 いツアーだった。 で出かけた。 中東情勢がたまたま平和な時だった。 帰国後しばらくした頃、 講演 (説教) は放蕩 (道楽) 幕屋集会の案内がきた。 息子の話につい キリスト -教の てだった。 関係者が 旅のお

を使い た息子 ありつ 産をまとめ、 どうか僕を雇 人 は、 分を、 いた豚飼 尽くしてしまった。 の兄弟が 帰って父に言おうと思う。 遠い国に旅立った。 13 13 ま分けてください」。父は財産を二人に分けてやった。 いた。 人として扱ってください」と。 の仕事で、 ある日、 その頃その地方を大飢饉が襲った。 彼は豚の 父のところに弟がやってきて頼んだ。「お父さん、 彼はそこで遊女たちと一緒になり、友達と遊び暮らし、 「お父さん、 餌の 11 なご豆を食べ そして父のもとに急いだ。まだ遠くにいた彼を父 僕は天に対しあなたに対し罪深い息子でした。 て飢えをしの 一文無しになった弟がようやく すぐあと弟は自分の全財 いだ。 ようやく我に返 財産の 全財産 うち僕 0

日で切れた。 は止まらず嗚咽になった。 どの あたり ただし説明らしい説明はなかった。だからわたしも聞いたことだけを、 で涙が流 ただ何年もして、 れ出 信者の男性が傍にきて、 したの その日のことを詳 か、 相田氏はわからないと言う。 しく話してくれたのだから、忘れていなかったの 静かに背中を撫でてくれた。 わたしにわかるはずが 幕屋と 時々思い \bar{o} 縁 な は こその

0)

5 えぴろー

まってくださいと相田氏は言ったはず。 そうだった上に津波が来た。 すがに疲れ 息子といわきに住んでいた女性が被災して訪ねてきた。 山形に行って温泉に入りたいと何度も言っていた相田氏も八十歳を過ぎ、 東日本大震災がきた。 たと言っていて、 わたしと知り合って山形が近い県になった。おいしい わたしと同じぐらいで相田氏が少しだけ知り合いだった、 気の毒だった。 食事は別にしたが、 一ヵ月以上とは思わず、 バ ス・ トイレ・キッチンは 訪ねてくる元気はなさ 食べ物と自然 部屋があるから泊 一つだ。 佐渡出身で の美

たが内心う 相田氏への 妻が抱えてきた兎の縫いぐるみをお見せしましょうかと聞かれた時、わたしは んざり わたしの見方も少しずつ変わってきた。 してい た。 彼女の人生を引き受けようと決心 ″はい″とは言 した夜 0

さんざん苦汁をのまされた女の過去の遺物を手放 色褪せて灰色がかった兎の耳はだらんと垂れていた。恋の形見というみたいに。 しもせず大切にしてるなん て、 どうか 7 61

しかない ンティシ ただ見方を変えれば、 。言葉の表現はないが、 ズムとわたしは思い 愛を手放さないためには、 ひょっとして彼は今もわがままだった元・妻を愛し続けてい たくなかった。 相田氏とは、それができる男性だったのかも。 辛く孤独な人の表情を彼は その弱点、 利己主義のすべてを許 一人の時はし それを自分 てい し受け る のか のロマ b だ。 る n

あけるともちろんいない。ほっとします。 不安そうだった。 これ認知症の始まりですかね。

この

「そうです 助けを呼

考え考えわたしは言

0

た。

孤

独な老人の不安がこたえた。

母が恋しい、 を兄は使ってしまった、というのが彼女達の言い分だった。生みの母なら、そんなことは言わない 戦わなかった。 いた。十万でも二十万でも渡すべきだとさえ言えずにきてしまった。 継母と、 血のつながらない姉が、 母に会いたい。 もの心つい てから、 名古屋大空襲が、 彼女達に逆らわずにきた習慣が七十歳を越しても、 父の遺産の兄のとり分を横取りするのをやめさせようと、 戦争が市民のとり返すすべない存在証明を焼き尽く 相続でもらうはずの金額以上 沁みつ

7

るとい 狙う悪者や泥棒がますます恐くなった。 父の死後数年 つか聞いて呆れて笑った。 て、 相田氏 の継母はなくなった。 家の回り に高い塀をめぐらし、 義理 \overline{O} 姉 はますます金持ちに 人を中に入れず暮ら なり、 その 資産 Ť を W

田家の跡継ぎは全員ひとり ĺŦ っちな 0) ね。 お金は本当に魔物なんだ。 お話を聞 61 7 W お

考えてやらなかったこと、それらの痛みが幻覚、幻聴になってい わってくる。兄をどこまでもかばわなかったこと、組合活動と趣味にかまけ 金はそれだけでは人を幸せにしないんですね」。 持たない者の感想だった。 、るのか 彼の 7 思い 本気で妻のことを が少 んずつ

しい人なんだ。いつか窓から見える緑の森を指さして言っていた。

ここを選んだんでしたが、 園芸高校の森なんです。 わかってないようです」 都心にあ いんな広い 森はめったにない。 息子に自然を残してやりたくて、

彼は てるとい 一人で何から何まで決めて動 日後に電話したが、 0 半年後、 留守電、二度目、 電話は いたに決まっている。どこであっても息子さんがたびたび行って で使われておりません、になった。 三度目も同じ。 入院か、 施設に入っ たか、 いずれにせよ

多分どこかで、 彼の人生は終わったのだ。

時々、本当に許して愛することを知っていた相田次郎氏のことを考える。 かったかも んど独りぼ 居場所も尋ねる人もわからないわたしは、 っちだった彼のことを。 それはたしかな幸せだった。 それでも優しさを手放さなかった人のことを。 見舞うことも、 便りを出すこともできなか わかってもらえず、 当人は気づ った。 ほと ただ か

祈 つ 短い時間でしたが て ろい ろあ ŋ がとうございました。どう してい 5 0 Þ 11 ま す か 平安を

K N O 河村 郁子 小野澤繁雄

同窓祭のキャンパスに心残ししも平成最後の名月に遇ふ	9 月 25 日	K
もうすぐに月がまるいねということを中の子と話し少しして満つ	9 月 26 日	Ο
野分きまた台風といふ大風の去りて「在庫一掃内閣」生まる	10 月 3 日	N
十月の七日は真夏日 わが父の五十回忌の法会営む	10 月 9 日	K
うろこ雲みるうれしさよみるところうろこつながりにうごいているよ	10 月 10 日	Ο
あの声は白鳥ならむあかつきに鳴き交はしつつ南へ南へ	10 月 14 日	N
通学の都電より見し白鳥は皇居の堀に季知らずなり	10 月 15 日	K

秋映も秋陽も林檎ともにバラで一二八円は฿をはえ、 しゅうよう

ジのつごうか

10 月 18 日

Ο

スチューベンはどこか懐かし濃き色の秋の終はりのぶだう味はふ	10 月 23 日	N
スーパーのフルーツ棚に一つのみラ・フランスあり。吾を待ちゐしや	10 月 25 日	K
背景は羽毛ゲイトウ スマホもて子が撮りくれしなかの我れなる	10 月 26 日	О
パンジーやビオラが並ぶ店先に木枯らし吹きぬ冬の入口	10 月 31 日	N
華やげる花舗にて祝儀の花択び三本の吾亦紅添へたり	11 月 4 日	K
金物を収れる金物金物店ワイヤーがみゆ鳥籠がある	11 月 8 日	Ο
竹箒、ざるやちりとり並べたる荒物屋あり勢至堂まへ たけばらき	11 月 10 日	N
豆腐屋はむかしと変はらぬ佇まひ石神井公園通りの老舗	11 月 12 日	K
小園は近道になっているらしくベンチ後ろをすれ違う人	11 月 30 日	О
東京の電車の人はイヤホンとスマホをまとふ鎧のやうに	12 月 3 日	N
この年のわれの十大ニュース選る大つごもりに一つ残して	12 月 5 日	K
赤銅になりきらぬ葉もまだ残るヒイラギナンテン四号棟冬	12 月 9 日	Ο

畳の部屋がないということではない。ここでは共同の作業であり、 人でない、当番同士でということ。家ではそんなことをしたこともないという。そんなことはしないのか。 二 斉に御堂の畳を水拭きせりわが家に拭きしことなけれども つぎの歌がお寺の掃除当番の歌であるところから、お寺の御堂だろう。一斉に、は一 そこに心躍りもある。 布宮慈子

みつこ(おばさん)をそれぞれ思い出したもので、明解で、なお切々とした調子のものだ。 後半六首は、祖母の、地獄絵のこと、仙台の七夕のこと、仙台のこと、 (生きてあらば九十歳となる

「仙台の七夕」と祖母は言ひしかど遂に行かれずサルビア赤し

としどしに咲く山ぼふし花数の多けれどことしは形小さし

丸山弘子

うところに気付く生活でもある。 山ぼふしの花数はたしかに多い。ことしは形小さし、とみているのはこれもたしかな目である。

ひもすがら日射し受けゐる百日紅小木なれど満開の花

り) (三首)、 意味で距離の近遠になっているのか、 百日紅も花数は多い。山ぼふし、藤、 のそれぞれ花の歌が続いて、燕、金星ときて、人(中国人) とおもう。 黄金百合、アマリリス、カサブランカときて、百日紅 外に出て詠っている歌。 の歌で一連は終る。 いろいろな (さるすべ

コンビニの店員名札に「ニャン」とありやや小柄なり中国人らし

で書いていた詩集「あざみのうた」のメモがみつかった、という。 して大学三年に編入していた頃に読んでいた詩集「智恵子抄」、そこに挟みこまれていた自身楠本幸次名 短信で、大病のこと、入院手術のこと、その後のことが語られている。なかで、本棚の整理中に、上京

煙の中にくゆらせているそれら、その煙はあざみの花の色に似るという。ある巡りあわせをいろいろに反少しずつ場面をずらしながら、あの人の口にした花の名前、水で書くことをしたあの人の名前、煙草の 芻しながら、そのことに意味があるよう。そういう時間があったことがすでに懐かしいのだ。

●暑き陽を浴びて伸びくるオカワカメ君だけ元気と声に出し言う

態が見た目や食感ともワカメに似ているから。 つる性植物の葉。別名「雲南百薬」とも云われ、栄養成分に富む食材でもあるようだ。 し竿に絡みつきくる、とあるように、オカワカメは正式和名を「アカザカズラ」というツルムラサキ科の 三首がオカワカメの歌。一連タイトルも「オカワカメ」。一つ前の歌に、蔓の伸びい Ļ 命名は、茹でた状 とあり、物干

覚的ながら可笑しさがある。君だけ元気、がいい。 声に出してしまうということはじぶんにもあるが、 独居ということでもある。 そこに作者にとっては

早朝につみ取る庭のオカワカメ肉厚き葉は今日の一品

て花の大きさ小さくは生れることなき泰山木の花

二旬目の

みれば、自然の不思議である。「生れる」の読みは「あれる」。 と読んだ。泰山木は泰山木として、木の大小にかかわらず、白い大きい花を咲かせる。あらためて考えて 「花の大きさ」のあとに「驚く」とか「やっぱり大きいなあ」等の作者の感想が隠されている 小野澤繁雄

桑の実のしとどに落ちているところ桑の木あれど仰ぎみるのみ

どものころは桑の実を食べたけれども今は取って食べたりしないのだよ、 いるからだ。「桑の」が繰り返され、理屈よりも懐かしさと寂しさがにじみ出る歌。 桑の実がたくさん落ちている場所には当然、桑の木がある。「仰ぎみるのみ」とわざわざ言うのは、 と時間の経過を含めて表現して

いつもと違ふ

河村郁子

路もわかる面白い歌が並んだ。次の歌は、すべて救急相談センターの人の話したことである。 ようだ。事実を克明に歌にしているのだが、これとて簡単なことではない。臨場感があり、 を測り、自分でできることをして経過を見てから区の休日診療、消防庁救急相談センターへ電話を入れた 夏の暑い夜、浅い夢から覚めた作者は体の変調に気づく。「私の熱中症」の一連を読むと、 作者の思考回 血圧や体温

「症状が進めばすぐに救急へ、 センターからの指示と伝へよ」

●満洲の記憶の景へ大西日

谷垣滿壽子

俳句や文章にして残してほしいと思う。 作者は満州で育ったのだったか。敗戦後に満州から引き揚げてくる過程を語る人も少なくなった。ぜひ、

梅雨に入る駄弁り尽くせしクラス会

と語りに語ってお開きになった。「駄弁る」という語を句に入れた勇気に拍手したい。 梅雨に入って開かれたクラス会では、特に全体に報告することもない。 日常のあれこれを懐かし 61 面

しょうびん聴こえかいなの風つくる

新野祐子

から鳥になってしまいそうな浮揚感がある。 の鳥」の異名をもつそうだ。その鳥の声が聴こえたので、腕を動かして風をつくるのだという。ある瞬間 アカショウビンは、森林に生息するカワセミの仲間。全身燃えるような赤い色をしたカワセミ類で、「火

マトもぎ悪事を為したような手よ

手をうまく表現した。「悪事」が強いインパクトを与えている。 作者は無農薬野菜をつくり、 それを契約者に届けるのを生業としている。 卜 マトを捥いで赤く染まった

雀の話

に止まった。大通りに面して立ち並ぶビル、マンション群の いえば鴉ぐらいで、雀を見掛けることもめったにない。 猛暑つづきのこの前の夏の話である。 どこからか雀が一羽 一軒であるうちのあたりでは やってきて、 うちの ベランダ の手摺 野鳥 n

にベランダの床をのぞきこんでいる。 びるにせよ、この小川で充分なのだろう。 うれ ベランダの端の溝にたまって小川状をなす水らしい。 しくなって眺めていると、 雀はハアハアした感じで口を開き、 目当ては、 なるほど、うまいところに目をつけたものだ、と感心し どうやらエアコンの室外機のホー 体の小さな雀にとっては、 頭の羽毛を逆立てて、 飲むにせよ浴 スから流 しきり n 出

ところがその H はまだ朝のうちで、 とい っても私の朝だから十時をとっくに回っ 7 11 たのだが

にと、植木鉢の受け皿に水を満たし、ベランダに出してやることにした。 まだエアコンをつけておらず、 小川もできていなかった。そこで、 雀が飲んでも浴びても 13

ない。 は体がかえって汚れるのではない と、雀は頭を低め、翼を広げて、 まったが の大きさの穴があちこちにあいており、 水浴びといえば、雀の砂浴びを見たことがある。あれは何年前のことだったか、 日比谷公園を散歩していたときのことである。 砂を巻き上げるように体を震わせる。 かと思われるのだが、 その一つで雀が砂浴びをして その 樹々の間の地面に三つばかり へんはどうなっている 水ではなくて砂など浴びて いるのである。 季節 0 かよくわ 足を止 も忘 お椀ぐら から める 7

でい 議だった。 る。 ハのそば ほかにも穴があるのに、 では、 評判 Oラー メン を屋の前 なぜそちらにい か 何 か のように四、 かずにこの穴だけに並んでい 五羽の雀が順番待ちをして るの か、 これも不思 列に並 λ

列から離れ、 穴のふちにい つ て、 砂浴び ししてい る雀の頭を コ ツンと突っ 0 Vi

「こら、長すぎるぞ。いい加減にしろ」

をしてい と言っ た先頭の雀が穴に入って砂浴びをはじめた。 ている感じである。 すると砂浴びしていた雀はあわてて穴から飛び出 雀の社会にも、 それなりの秩序があるようで Ļ 今度は順番待ち

65

ある。考えてみると、この世界には、雀に限らずそれなりの秩序と文化をもった多くの生き物たち の社会が重なり合っているのかもしれない。

てしまった。 ベランダの雀は、 水の器を置いてやろうと私がガラス戸を開けると、 当然のことながら飛び立っ

「清紫会」だより

◆ 第 170 回 平成三十年八月十六日(木)、会場・文京シビックセンター三階C会議室

〈提出作品〉林博子・落とし物/松井淑子・雀の話

第 171 回 九月二十日(木)、会場・文京シビックセンター四階シル バ センター和室二

〈提出作品〉林博子・「蟬」の字

▼第17回 十月十八日(木)、会場・文京シビックセンター四階シル バ センター 和室二

〈提出作品〉林博子・台風その前後/松井淑子・テレビ番組

遊んでい ていたと かった。 昔の なった。 浅 映画 0 寄席は、 ない いうエレ 演芸ホ 結社内小歌会で恒例の秋の吟行会である。 のような場所 な、 都内にしるまちはわずか。 と思った。 ベータも浅草になじんでいないので、 ル (はっきり 内 四 で、 階 0 予備校に通うために、上京して板橋区内の下宿に住んでいたことがあ 椅子がやや狭く、 した記憶のなかでは)初めて。ビートたけ 東洋館というところで、 昼の吾妻橋から、 硬く、 二十組、 尻が痛くなった。 落語以外の演芸 ただ聞くば 中入りを挟んで四時間余という時間 の雷門からスカイ かり。 笑いでなけ しがエレベ (多く漫才) そもそも ツリ ータボ じぶ れば をみるこ が怪獣 耐えら んは東京 映画 イを ħ で な

なかでのようにビル の間にアンバランスに大きくみえた。

最初 ともほしいところだが 天候異変が続き、 くところによると山は は少し出たようだが、 深まり ナメ 夏の暑い時期にクマやイ コ 0 シー ブナグル その後はさっ ズンとなっ ミが豊作だそうである。 たが、 ぱりだと言う。 ノシシが里に現れて農作物を荒してい 気候に左右されるこのナメコ。 山のもの 自然界と人間界のスマ は天候次第で良くも悪くも 台風 のもたら ったそうだが、 な棲み分け 神村ふじを が何 聞 で

と称して、 この夏の熱中症を拗らせた私には冬の低体温症との双方要注意になる。 ◆ 父 0 五十回忌法要の十月七 同 世代の友人たちからの賛同も得たり 日 は真夏日でした。 十月は気温 して いる。 冬にも暖房による熱中症が の変動があ ŋ 自 らを温度調節 あるとか、 失調症

は会話 び る つ の流 生の贈りもの」で渡辺京二氏が、 と「運命」 れの ひと足さきで良かった。 中で「大連」と は同義語ではない 「アカシア」を書き、 去年も記憶違い ふるさと、 0 ただしどっ ニセアカシアの街・大連を語っ かもしれない ちも、 布宮さんに送った。 外からやってくる。 が、 石牟礼道子さん その あと朝 今回 て居られる 0) H O新聞 原稿 でも 0) 0 城 ので 一語

69

も不思議なところがある 河内愛子

る ますようお祈り の苦手な私故、 台風に何度も見舞われ、その後始末に明けくれてい 夏の猛暑が不思議に思える程、 、致しております。 どんなに大変かとお察し申し上げます。 爽やかな日々がこち お体にお気をつけ らっ らでは続い し ゃる方もおありと存じます。 ております。 の上、 おすごしくださ 災害列島と云え 谷垣滿壽子

は通っ 鴨の あり、 ろが昭和三十 家まで行っ 九月二十 が広が ル 鶴岡側 てみたいという私たちの願 湯治客で賑わったという。 ・トはす・ つ 八日晴天 7 年代に木川ダ てきた。 11 たれたが、 \exists 連峰を縦走 0 この H 今から十年ほど前から白鷹山岳会が刈り払 ム建設に伴う林道が造られ、 ルー 山 している。 1 形 また、 は、 県 いが叶えられた。 江 白鷹町黒鴨から頭殿山 私の 戸時代後期の 『日本百名山』で有名な深田久弥が大正十五年にここを通 両親も青年団の頃に大朝日 か 小嶋俊親日記に記載がある。 つては炭焼きがなされただろう橅紫 そこを通っての登山が一般的に の山腹を通り朝日鉱泉ナチュラリ 13 に励み、 登山に辿ったと話す。 復元させた。 鉱泉宿は三軒 の美しい二 なった。 Ź

になり、 たことに気が もそろそろ……」と言われる。 何十年来お世話になってきた歯科医さんが近日中に閉院されるという。 事故を起こしては一大事だからとのこと。主治医をお願い つき、 大いにあわててい 自分のことばかり考えて、 る昨今である 先生方の してい 年齢や事情に思い 高齢で手先が震えるよう る内科の先生も、 を致さなかっ 松井淑子 「自分

で、 よりず 九月後半から十月にかけて、 空留守には ホッとして 工事中 分遅れた。そのあと小さな庭だが植木屋さんにもお願い しない いるところである。 _ 日中家にいることはないのだが、 ようにしてい 家の外廻りの工事があった。 た。 少しだが私の行動に制限がかかっ 用事があったり連絡事項があったりするの しか してあるので、 し天候に恵まれず、 てい た。 それが終るとホ しかしそれも 仕上 ŋ 丸山弘子 がは予定 ツ

とは何か られてい の全方位独学法」とある。 など、 る。 強を。 ル 数学に限らずの言葉通り、 が 人生で迷い道にい に限 0) 図書館から るときの道しるべとなるような思考が次々と語ら い数学の話かと思い 『虚数 という巻頭 数学の話に入る前の の情緒』 言か とい ら始まり、 う分厚 ながら頁をめくると い本を借りてきた。 「0章」では個性とは何か、 学習の 心得が熱い -さあ諸君、 副題に 言葉で延 れてお 生き甲斐 勉強を始 ŋ その

71



の終焉だといわれるほど政治状況もひどかった。 くのみである。 ◆ことしも終わろうとしている。 来年はどんな年になるだろうか。 一年を象徴する漢字が しかし、 「災」と出た。 これで終わるわけではない。 自然災害が多く、 己が道を行 民主主義

あった。 たから、 とばがあった。 もっていた。 人に嫌なことはいわず、 うい 親戚のきよのさんが百一歳で亡くなった。 た。 起きてみて驚い それでも清らかな性質のまま年を重ね、 なるほど、 降る、 まっさらな雪は、まこと故人の旅立ちにふさわしい景色だとい 降ると予報では言っていたが、ここ山形でも油 めでたい た。 11 つもにこにこして楽しい話をする人だった。 喪主は六十代の孫だった。 のである。 十二月九日 数え年でいうと百二歳 人生を終えたのだ。 その挨拶に「サルド の葬儀の朝、 断するほど暖かい の大往生。 いきなり三十セ 生活の (サラド) う。 戒名には 大変さは、 きよのさんは他 日が続いて ン 」というこ チの雪が積 もちろん の字 11

って『やまがた「方言」歳時記』 (サラド) 」の項があった。 引用しよう。 (矢作春樹著、 東北出版企画、 \bigcirc 一三年) を見たら、

でした。 れが一筋の足あとであっても人の通ったあとを歩むのは、 吹雪に明けた朝、 深い 雪にうずもれた道を最初にたどるのは、 何かしら心あたたまる思い ほんとうに難儀なものです。 がしたも

ない おおよそ次のようです。 一面が積雪でおおわれて歩いた跡がない雪の原を方言でい からでしょう。 (図は略) 天童 • Ш 形 上山 一帯にはその方言がありません。 ろいろに言いますが、 県内の分布は 積雪が少

新雪の処女地 サラチ サラドやサル (新地) のことなのです。 とかサラユ ドの語源は、 (新湯) 接辞サ に、 から 新のアラ、 わかるように 所の 「まだ使ってい 1 -が複合 したもので ない ر اع しょう。 を意味 またサラは します。

れませ サ ラトを進み行くことを、 ていたようです。 ですからサラト サラト ヲ コ ーグと言い は、 もっと広い地域で使われていた古いことばなの ましたが、 広島県山 県郡中野 でもサラテをコ か グ

奥深い ことばである

(布宮慈子)

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンラ イン版「展景」を公開しています。

info@muninokai.com 山形市上町二―一―七―二〇二 無二の会「展景」発行所 編集・発行人 季刊 展景 92号 二〇一八年十二月三十一日発行 スタジオ・マージン

布宮慈子

Copyright © 2018 MUNINOKAI. All rights reserved.